岡山理科大学紀要 第43号 B pp. 51-58(2007)

動詞成句から得られる英語の新文型の提案

河本　誠

岡山理科大学総合情報学部社会情報学科

(2007年10月1日受付、2007年11月2日受理)

目的

ここでの主張の要点は、英語において、他動性を強く持った動詞に対し、典型的なSVO、SVOCなどの文型のほかに、他の2つ文型（SV□AとSV□C）を新たな文型として認める根拠、理由が存在する、ということを示すことにある。

［1］問題提起

筆者は長い間次のような英文の理解に苦しんでいた。

(1) She still <u>believes in</u> Santa Claus.　　彼女はまだサンタクロースの存在を信じている

(2) What time did the plane finally <u>take off</u>?　その飛行機は最後にはいつ離陸しましたか

（この2例を含め、例文はほとんど参考文献(4)、(5)、(6)で挙げた3つの辞書を利用させていただいた）

これらの文では、動詞believe、takeそのものが本質的に他動性を持っているが、それらが目的語を伴わない形で使われている。これらの動詞とその後の前置詞inや副詞offは、辞書では成句として扱われており、文全体の意味が取れない、という意味での難しさではなく、これらの成句がなぜこのような意味になるのか、という疑問が続いていた。疑問の中心は、他動性の動詞でありながら、その目的語が、表面上、文の中にないということである。こういったものを含む成句は、現在、英語の大きな特徴の1つと言えるほど発達しており、極めて多く頻繁に使われている。そういったものの中で、ここで取り上げる、一般に動詞成句と言われるものの中には、成句を構成する各単語の意味の合成からは成句全体の意味が取りにくい場合があるが、そういった場合の構成の論理が説明されているのを筆者は見たことがない。そのような難しさを感じる成句が、他動性を持った動詞を含んだものであることが筆者には徐々に感じられてきていたので、ここで整理することにした。

そこで、ここでは、英語において難しさを感じる動詞成句は、その中の動詞が他動性を有しているがその目的語を伴っていない場合であり、また、このような動詞成句においてもその中に単純な構成の論理、法則があり、その論理、法則を使えば成句を構成する各単語の意味から、成句全体の意味が容易に合成されるのを見ることができる、ということを示す。

［2］自動詞 vs. 他動詞

英語の成句として様々な種類のものが存在するが、一般に、動詞を含んだものとして、上記以外に次のようなものがある（(4)、(5)、(6)は動詞成句ではない）。

(3) All the best things <u>come to an end</u>.

(4) (文脈上から明白に決定される目的語の省略)

(5) Thou shalt not <u>kill</u>.　　汝人を殺すなかれ。

(6) She's <u>eating</u> for two.　　［遠回しに］彼女は今妊娠している。

(7) Her recklessness <u>brought about</u> her death.

(3)は他動性を持たない動詞を含む成句で、理解に苦しむ点はなく、辞書で成句として取り上げる理由は、このまとまりでよく現れるから、という程度のことであると思われる。(4)は、文脈上から目的語を具体的に補うことができる、いわゆる文脈上の省略現象であり、日本語にも共通している現象で困難さは感じない。言

語一般に共通した現象であろう。(5)は法律文のようなものであるが、前に出てきた名詞の省略というわけではない場合である。これは目的語を伴わないことから動詞の意味の一部分に着目した表現であり、日本語でも使われる表現方法で、これも問題ない。この場合、日本語訳では目的語が現れ、日英語でまったく同じというわけではない。(6)では、eat はこの意味では辞書で自動詞の項目に分類されている（ジーニアス）が、これは単なる自他の定義に関する事柄であろう。eat はやはり本質的に他動性を持っていると考えられ、ここでは(5)と同じように、その目的語（それが表わす対象）を表に出す必要がないだけのことである。ここでは文全体が婉曲的な表現になっていてその点での難しさはあるものの悩むことはない。(7)では、about が副詞であり、her death が動詞 bring の目的語になっていて問題はない。これら(3)から(7)の動詞成句に比べ、先に挙げた believe in や take off の成句では、筆者には質の異なる違いが存在しているように感じられ、長い間悩まされた、というようにまとめられよう。ここで注意しておかなければならないのは、take off では次の用法があることである。

(8) Take off your shirt.

(9) You've taken a heavy load off your shoulders.

(8)は(7)と同じく、off が副詞で take の目的語が your shirt であると考えられ、全体は通常の構成の文といえる。(9)では、take の目的語が a heavy load であり、off は前置詞として機能していて、何ら問題はない。したがって、同じ take off の成句といっても、ここで扱うのは、辞書で自動詞用法と分類されている(2)の形の文で、この論文では、take off 型という場合には(2)の用法を指すこととする。

整理すると、他動性のない動詞の成句というものは、比喩が入り込む点での難しさは有り得るが、成句全体の意味、構成に関して取り立てるほどの問題点はないといってよかろう。また、他動性をもった動詞でもその目的語が、文脈上省略されたり、また、目的語で表わされる対象に着目する必要がない、といった目的語が伴わない用法（(5)、(6)など）も、言語共通の現象と考えられ、単なる省略ということで済ますことができると思われる。そこで以下では、他動性をもった動詞が、目的語なしで成句として現れる場合を取り上げ、その場合、隠れた目的語が存在するのか、存在するとすればどう考えたらよいか、という方針のもとに考察を進めていくことにする。結論としては、上記(1)、(2)に見られる構造は、隠れた目的語が互いに排他的な関係で根底にあると考えることにより、合理的かつ一貫した形で理解することが可能であることを示すことになる。

[3] believe in 型

動詞が他動性を持ちながら、目的語を伴わない(1)のタイプの文として、これまでよく研究されてきていて関連すると思われるものに次の文がある。

(10) Two guys walked in and just started shooting at people.

この動詞成句については、すでに先行研究で指摘されているように、at がないＳＶＯ型の文(shooting people)との違いが取り上げられ、この例では動作の完遂性の違いということになる。即ち、at～部分では shoot の動作を受ける場所（着点）に焦点が当てられることから、動作の完遂は必ずしも表されなくなるということである。Shoot の場合には、このように shoot people という VO 型も成立し、それとの差に気を取られがちであるが、shoot は一般に目的語として矢、弾丸、弓、銃などを取ることもでき、今の例では、それが隠れた目的語とみなせるのではなかろうか、むしろそう見なすべきではなかろうか。Shoot people と対比させるのではなく、shoot something at people が発想の根底にある表現ではないかということである。つまり、(1)の例で言えば、believe の目的語として「これだ」と特定し難いけれども、さまざまな believe の動作の対象となる出来事、考え、教えなどが根底にあると考えられ、また形態上では that 節なども可能であろうが、それらが省略された形であり、in 以降でその行為が及ぶ場所（着点）が示されていると見ることができる。つまり、

(11) I still believe some thing(s) in Santa Claus.

が(1)の根底にあると考えれば、目的語省略の一種と見ることができるのではなかろうか。このように、some thing(s)部分が文構造の根底にある、ということが、believe in 型の成句の構成論理ではないか、ということがここでの筆者の発見、主張の１つである。動詞 kill でこの種の文型が無理なのは１種類の目的語しか取ることができないから、と関連しているかもしれないが、この点はさらに調べてみる必要がある。

このように考えると、他の動詞でも同じ現象が成立するかどうかを見ておく必要がある。まず他動性を備えた pull、step ではどうであろうか。

(12) It's nice to relax with a cup of coffee without the kids pulling at my leg.

(13) If you don't step on it, we'll miss the plane.

などが例文として辞書に載っており、これらの場合も pull や step の動作を受ける場所（着点）が前置詞句として表示されていると見ることができる。そこに焦点が当てられている、ということで、これらの動詞成句も believe in 型と理解することができる。また、辞書では成句の扱いは受けていないようで、

(14) Drink of the cup. 一口飲め《◆ of は「... から一部を」の意》

(15) I partook of dinner with him. 彼と夕食を共にした。

などの文では、of が part of の意味だと説明されてきているようであるが、筆者としては of は単に「～から」という意味であり、believe in 型と同じように drink や partook の隠れた目的語が省略されていると考えて良いのではないかと考える。この場合、隠れた目的語はもちろんその後の the cup や dinner の中身の一部ぐらいに考えられる。

以上から、ここでは他動性を強く持っている動詞に対し、その目的語になる対象が根底にあるが省略されていて、その動作を受ける場所（着点）などがその後に前置詞句、副詞として続くという、不安定さを抱えた形であり、日本語に対応する形がないことから、これを文型 SV□A として提案するものである。

なぜ日本語にはこの型は存在しないのだろうか。英語の構造と似た形での訳を作ることが無理であり、かなり言葉を補わなければならない。これは、英語が様々なものを目的語として取り得るということと関係していると思われる。たとえば、動詞 wipe を見てみると次のように多様な目的語を取ることができる。

(16) Ask the waitress to wipe off the table.

(17) Let me wipe that mustard off your cheek.

(18) Wipe your feet before you come in. （床の上に置かれた足拭きの上で足を拭く状況）

英語では、各動詞が目的語を様々に取ることができることが推進力となって、believe in 型の文型を生み出すのではないかと筆者は予測している。SV□A の文型を取るかどうかというのは、動詞 V そのものの意味が関係していることは当然である。

以上のように考えると、(1)は、"I believe Santa Claus"とは意味が決定的に異なり、辞書の説明にあるような Santa Claus の存在を信じる、という違いがあることが理解できるようになる。

[4] take off 型

SVO が英語において基本の文型であるということに疑問の余地はないが、(2)の take off の例のように、明らかに強い他動性を持った動詞でありながら目的語を伴っていないことが筆者を悩ませてきた。(2)の例文もやはり英語の基本の文型が根底にあるはず、という方針のもとに成句全体の意味を考えることにより、筆者は次のように考えればよいことに気づいた。

(19) ... the plane finally take (itself) off?

すなわち、動詞の目的語が主語の再帰形であると考えれば、ＳＶＯと同様、動詞の他動性の意味が主語と目的語に対し保持されていることが分かる（この例では擬人的と思われるが）。主語の動作主としての主体性、意志性が保持されていることも分かる。

このように、(2)では主語の再帰形が隠れた目的語になっていると考えると、この場合の動詞成句はすべての点で合理的に理解される。他動性を持った動詞の主体が主語であることは、次の例でさらにはっきりと示されている。

(20) Thousands of people took to the streets after the government declared elections void.

(21) Thousands of people took (themselves) to the streets after the government declared elections void.

従って、(2)ではやや擬人的な使われ方であると考えられるが、動詞の表す動作の影響が、主語が表す対象に再帰的に及び、その作用の結果や影響が動詞の後の副詞や前置詞句に現れる。筆者はこのことが分かって以来、他の動詞でも同様の状況の時、再帰形を補うことにより、その成句を含む文の意味がうまく理解できることを確認してきた。

今回、筆者が take off 型の構造をしているとはあまり意識していなかった、他の他動性が強い動詞を取り上げ、それらにこのような用法があるか調べてみることにした。

(22) The train pulled into the station. 列車が駅に入った。

(23) The dog pushed up against him.

(24) The tide of factory workers sets homeward after 5.
5時を過ぎると工場から労働者の流れが家路へ向かう

(25) The rainy season has set in. 雨期に入った

このように、いくらでもこの用法が見られることが分かった。最後の例では、筆者は使い方は覚えていたけれども、再帰形を補って考えてみたことはなかった。以上のことから、本来、他動性をもった動詞に対し、表面上、目的語を伴わない take off 型の成句は、不安定さを抱えた形であり、しかも、少数の動詞に限られる例外的なものではないことから、文型 SV□C として考えてよいのではないか、そう考えるべきではないか、という結論に達した。この成句は再帰形を補えば正しく成句全体の意味が説明されるというのが特徴である。筆者としては、他動性の強い動詞を1つ取り上げた場合、それが取りうる文型として SV□C がその1つの候補になりうるが、その意味は、この文型が持っている構造の意味と、動詞の表わす意味とが重ね合わされ整合するとこの文型が実際に現れる、と考えるものである。したがって、新しい文型の提案であるけれども、他動性を持ったすべての動詞がこの文型を取らなければならない、と考える必要はない。例えば、この文型は動詞 kill では無理であるが、このことは SV□C を、他動性を持った動詞の文型と考えることを妨げるものではない。すべての他動詞が例えば SVOC を取ることができるわけではないのと同じである。1つの動詞に着目して考えれば、SV□C の S と V の関係は、その動詞の SVO、SVOC における S と V の関係と同じであり、したがって、典型的には動詞の表す動作の動作主である。この意味で、take off 型は他動性を保持した自動詞用法と言えないこともなかろう。

この文型で、主語の再帰形を目的語として補うことによって合理的に成句を理解できるということは、これが非常に簡単かつ自然な仕組みであることを示している。1つの問題は、なぜ再帰形が表（表層）に現れないのか、ということであるが、これは筆者の今後の課題である。

筆者はこれまであまり意識して考えたことはなかったのであるが、考えてみれば次の文もこの形になっている。

(26) Keep off the grass.

(27) They got off at the next bus stop.

(28) Children should keep away from the pond.

この文型の特徴を繰り返し述べると次のようになる。他動性を持った動詞の take off 型の文型 SV□C では、動詞が表わす動作の主体である主語の主体性（意志性）が、そのまま保持されている、ということである。ただ、(2)の take off の例では、やや擬人的な用法と言えるけれども。その点で、他動性のない動詞による言い換えは可能であっても、それとは異なっていることが次の文と比較すると理解できる。

(29) plane finally go off?

(30) Thousands of people came (out) to the streets ...

(2)、(9)の日本語訳は、これらの文(29)、(30)の他動性を持たない動詞の文に対応させる以外になく、take off 型に対応する文型は存在しないと言えそうである。

ここでの成句の構造は believe in 型とは異なる。(1)や(10)の例で、

(1)' She still believes (herself) in Santa Claus.

(10)' Two guys walked in and just started shooting (themselves) at people.

などと再帰形の目的語を補っては全く理解できないからである。従って、次のようにまとめられる。

Believe in 型 — 目的語に焦点を当てないために目的語を表に出さない

Take off 型 — 目的語は、最も簡単かつ自然な主語の再帰形であり、それ故に表に出さない

しかし、両方の成句とも、動詞は他動性を強く持っていて、主語は動詞の表す動作に対し SVO、SVOC と同じように主体性、意志性などを保持していることも共通している。ただ、kill や murder のような行為の完遂が組み込まれた動詞ではこれらの文型はともに取ることができない。だからと言って、これらを新たな文型として認めない理由にはならない。

まとめると (2)の take off という成句は、動詞が他動性を持っていること、その目的語が文脈上の省略ということではなく、その後ろに副詞、前置詞句などが続いている形であること、そして多くの動詞でこの形が成立するということが、SV□C という文型を設ける理由、根拠である。

ここで最後に、筆者が非常に悩まされてきた次の成句に触れておきたい。

(31) My efforts paid off. 私の努力が報いられた

これは My efforts paid themselves off と take off 型と考えれば、off は「[強調] すっかり、完全に」の意味と考えられ、主語の「私の努力」が努力自体に支払いをする、お返しをするのであるが、それが off（十分に）である、ということで説明がつく。

［5］能格文、中間態構文との比較

Take off は take が目的語を取るかどうかで表面上、自他の両方で使われる。

(1) What time did the plane finally take off?

(8) Take off your shirt.

この違いは、目的語として主語の再帰形かそれとも別のものを取るかの違いである。形態は1つでありながら、自他の両方に使われる動詞には能格動詞と中間態動詞があり、take off の自他の用法と似てはいるが、それらの用法との違いが何であるかを見てみることにしよう。始めに、なぜ、中間態構文や能格文においては、自動詞の用法に対し、oneself を補って考えられないのだろうか、という疑問である。

(32) The meat doesn't stew well.

v.s. The meat doesn't stew (itself) well.

(33) My wound healed.

v.s. My wound healed (itself).

次に、逆に take off を能格動詞や中間態動詞と見ることはできないのか、という疑問である。

(34) The pilot took the airplane off.

v.s. The airplane took off.

Take off 型の自動詞文では、主語の意志、意図、意欲などが SVO と同じように働くと考えられ、それが中間態構文や能格文と異なっている点である。(32)、(33)では、主語の表す対象に意志性は全くない点が決定的に異なっている。また、それらは擬人的用法になっているとも考えられない。違いの原因は、能格動詞が1語で能格文を形成することに起因していると思われるが、能格動詞が表す動作は、言語使用者が他動性を認識しない動作であるのに対し、take off 型では他動性が認識される、ということではなかろうか。これは、おそらく take off 型が1語ではなく分離していることから、構造の意味が入ってくることと関係していると推測される。

Take off 型の文が、中間態構文や能格文と共通している点は、目的語に位置するものが、主語の位置にも現れるという点だけである。中間態構文が、特定の出来事の具体的な描写を行えない、という制約に take off との違いが反映されていると言える。主語と動詞の関係に主体性、意志性が介在するかどうかの違いである。(32)や(33)のような中間態構文や能格文は、他動性ということが言語使用者の意識に上らない表現であって、その場合、再帰形を目的語として取る解釈はできないであろう。

吉川は、能格動詞は自動詞から派生するか、形容詞や名詞に由来するものが多いとまとめている(「動詞の文法」: p.110)が、本質的に他動性を持った動詞に対して、副詞、前置詞句などを伴うことにより、構造の力が働き、一見、能格動詞や中間態動詞のような振舞いを示すが、他動性の意味を保持し続けている点が能格動詞とは異なっている、という特徴が見えてくる。

［6］Take off 型分析の応用（with を伴う型を中心に）

筆者は、これまで、put up with がなぜ「我慢する」という意味になるのか、いろいろ考えてきたけれどもあまりうまくいかなかった。with を伴う動詞成句の分析を with に着目して考えてきたのであるが、今回、take off 型の構造という視点から見てみることにする。

(35) We have to put up with the bad weather.　ひどい天気だけどしょうがないね

この場合、take off と同じように put ourselves up と考えるとどうであろうか。Up として、どういう点が up と考えられるのかがポイントで、筆者の最終的な結論としては、“（人が）上機嫌で”、という意味に取ることで、そう考えれば成句全体は「機嫌を損ねず、bad weather とは共にいなくてはならない」ぐらいの意味となり、うまく全体の意味が作り出されると思われる。ジーニアスの辞書によれば、put up with の項目の中でこの成句が、

「じっとこらえる」というより「しようがないとあきらめる」軽い気持をいう

と解説されている。この点でも ourselves を補う分析と整合するように思われる。以前は、ourselves（再帰形）

を考えず、何か別のものの省略と考えようとしていたことがうまく分析できなかった原因と考えられ、上のように考えるとうまくいくことが分かり、もはや believe in 型を含め、他の解釈で考える必要はないと思われる。

[catch up with]

(36) I ran as fast as possible to catch up with her.

辞書の解説では「≪米≫では with のほかに to も用いられる：≪英≫では with を用いない用法もある」と書かれている。Catch up with と catch up to は、成句全体ではほぼ同じ意味になるが、また、それらとイギリス用法の catch her up とが全体の意味でほぼ等しいとしても、根本の発想が異なっているということが次の take off 型の分析で明らかになってくる。つまり、次は take off 型の SV□C として考えるわけである。

... to catch (myself) up with her..

日本人の発想からは catch するのは her でなければならず、この点が気になるところである。この「私が私自身を捕まえる（到達させる）」というのは日本人の発想にはないと思われるが、筆者には許容可能なものと感じられる。それは次の文の発想と類似しているからであろう。

(37) I woke to find myself in a strange room.

目を覚ますと自分が知らない部屋にいるのに気づいた

因みに、ここでの up の意味は「[到達]（達して、追いついて）」であって、put up with の up の意味とは異なると見なければならないであろう。

類似の成句として

(38) I must catch up on my reading [sleeping].

もあるが、これも catch myself up と考えれば、catch up with の場合と同様に意味解釈できることが分かる。Catch up with her と catch her up とが全体として意味が似ていることから、catch up with の catch の目的語として her を考えがちであるが、put up with の例など他の成句も合わせて考えると、catch up with her の場合、catch の目的語は主語の再帰形であるという結論に達する。

[keep up with]

(39) I have to keep up with the times.

この表現は、put up with とは違い、筆者には違和感がなかったが、同じ流れで分析してみれば keep myself up で、catch up with の状態版といったところであり、take off の SV□C 型と分析すれば問題なく説明できる。

以上、with を伴う動詞成句で、動詞そのものが他動性を強く持ち、かつ、その目的語を伴っていない成句についても、SV□C の文型と考えると、take off 型と同様、一貫した形で成句全体の意味を理解できることが分かった。

［7］まとめ

辞書では成句の構成に触れず、成句全体の意味が説明され、それを使った例文が取り上げられるだけである。表面（表層）上の目的語が存在すかどうかを基準にして、成句全体が自動詞、他動詞に分類されているわけである。それに問題があると言っているのではないが、大きく異なった言語を母国語として使っている者にとっては、成句の構成に疑念がもたれるのに、その部分の説明がないことが残念である。他動性を持つ動詞成句に関するここでの考察から、それらが成句と言われているものの中で（筆者にとって）最も理解に苦しむ成句であることが認識され、結論として、他動性を持った動詞の成句でその動詞の目的語を伴わない成句には believe in 型と take off 型の２つに分類できそうである、という成句分析手段が得られたことは、非常に大きな成果であったと感じている。この２つで分析できないようなものがあるのかどうかは、筆者の今後の課題である。

Believe in 型では、動詞が示す動作を受ける場所（着点）が前置詞句で示される。この場合、believe に対する表に出ない目的語には、さまざまなものが考えられるが、主語の再帰形は決して考えられない。こういった動詞を比較すると、具体的な目的語の想定のし易さなどは当然動詞によって程度の差があると考えられる。Take off 型では、動詞が他動性を有していて、主語で表わされる動作主が意図、意欲などを持っている場合、それがそのまま成句でも保持されている点を強調しておきたい。

Believe in 型の SV□A と take off 型の SV□C との関係は、共に表に出ない目的語が主語の再帰形かそうでないかの違いであり、その意味で、排他的関係にあるといえる。他動性のない自動詞が、目的語を取ること

ができる用法もあるが、この場合の目的語というのは形が限られている（同族目的語）。

(40) I dreamt a dreadful dream.　私は恐ろしい夢を見た。

この場合、文型という構造の力で目的語を取ることができると考えられる。逆に、他動性を持った動詞に対し、それが前置詞句や副詞を伴った成句の場合には、目的語を伴わない場合でも、動詞の後にそういった続くものがあることから文型（構造）の力が働いて believe in 型、take off 型の特殊と言ってよいような構文が出現する、と考えられる。両成句とも、能格動詞や中間態動詞に似てはいるが、主語の主体性、意志性などが表現される点で、そういった動詞の用法とは異なっていることが分かった。

ここでは believe in、 take off を中心に取り上げたわけであるが、これらの成句の中の動詞は他動性を強く持っていて全体で成句の扱いを受けるのであるが、他動性を持っている動詞に対し、SV□A と SV□C の文がかなり自由に作られることも強調しておきたい。辞書においては、こういった用法が、動詞の項目では自動詞に分類して記述されているが、それには一理あるものの、むしろ、他動詞の１つの用法と記述するなどの工夫を行うことが望ましいと思われる。

参考文献

1) 影山　太郎　“自他交替のメカニズム”
丸田　忠雄・須賀一好編　「日英語の自他の交替」　ひつじ書房　2000
2) 吉川　千鶴子　「動詞の文法」　くろしお出版　1995
3) 影山　太郎　「動詞意味論」　くろしお出版　1996
4) リーダーズ英和辞典　第２版　研究社
5) ジーニアス英和辞典　第３版　大修館書店
6) Longman Advanced American Dictionary　Longman

New Sentence Patterns for English Transitive Verbs Obtained From the Analysis of Their Idioms

Makoto KOMOTO

Department of Socio-Information, Faculty of Informatics,
Okayama University of Science
Ridai-cho 1-1, Okayama 700-0005, Japan

(Received October 1, 2007; accepted November 2, 2007)

I take up, in this paper, so-called verb idioms containing intrinsic transitivity but having its object noun missing in their surface structure. These idioms are shown to consist of two types: "believe in" type and "take off" type. In a sentence containing "believe in", the action of "believe" reaches the place shown by its "in" prepositional phrase. The object of the verb "believe" is missing but understood to be there even though what is missing will be often difficult to determine. In a sentence containing "take off", the object of "take" is also missing but identified as the reflexive pronoun of the subject in the sentence. I propose that we should set up these two sentence types as two new resentence patterns like SVO or SVOC. The reason for this is that the verb in these two sentence patterns keeps strong transitivity but missing its object in the surface structure, and these patterns are used for a lot of transitive verbs. One of the characteristics of these sentence patterns is that the subject of these sentences is understood to have the same willingness or intention as in the case of their SVO patterns, which means that these sentences are different from intransitive verb sentences like SV or SVC.